

9295
3

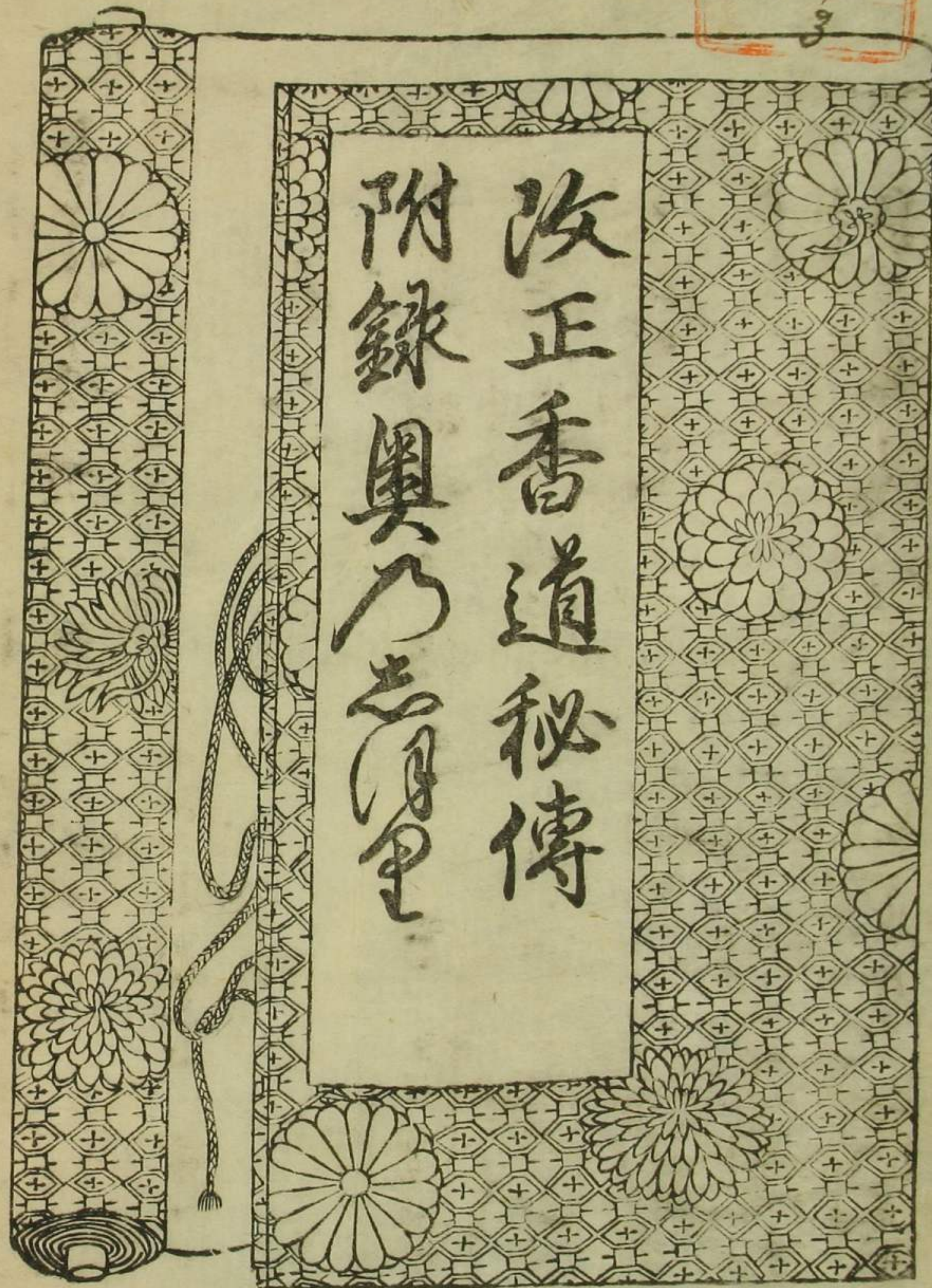
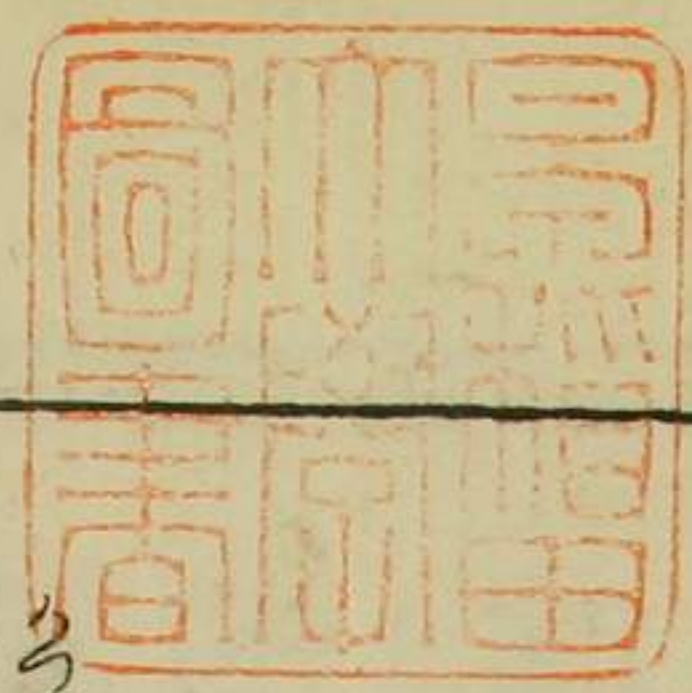
改正香道秘傳
附錄奥乃志月里

香道秘傳附錄奥之梨上

大板流芳 著

奥之梨小引

曾聞一姓煙中得意九淵塵裡偷閒
月裏黃庭堅り之梨少之風雅
溪逸のそりけ道了ゆもゆもゆと
ぞうゆもば唐少も花睡が香傳洪
留が香傳程泰が香深乃とる書



りもろくそきと歌の節よりおわたり
け國乃おたる代よりと探るまとい
りて著と所の書あり集て香道秘
傳とてし御よる書一美あやる書
なりちるれども洞簡より辨る事
略しとけりかひりのわり依るも
深意とわたりしと洞略と補いけ道
小な紙ゆくとけ入ても奥儀と約

ゆきたよりとるしとて香葉と
導の葉をとりてと改は注す
むなりしとけりしとすなり

○雪月花集考

右雪月花の香次々と本書に記すま
は六十様より志野宗湛の定らば
六十一様より別る流うはけ六十様
乃香とそきとすなり也流家より事代

の秋に載ゆ

太子和州に降ちて細る所徳太子親

香の像は此より本なりと削る

くげと細る納是とも和の太子と云

香は是より日本香なりと始り蘭

者侍は南都東大寺の付物と云

聖武天皇の納めひ世々勅封なり天

下草創の將軍一寸四方つ切れ給ふ

なり信長公元龜三年三月廿八日は切

れ給ふ河内代ハ慶長七年六月廿日は

切れ給ふけ給ふと昔事なりと云掃

かり事案と云今日蚊脚程も云

もの傳事ありは好案と云今も名

と呼香は多く生物ありの少く偽名

多し太子ハ一向の沙汰なりと云世

と後ては記事と云一蘭奈侍今南

香道集の支所二

都に残りりの三費五百目あり本の
 長さ八寸ありと云
 紅沈の紅塵と書一冊もあり考はく
 ふわり是も勅封して東大寺ふわり
 本目今四費七百六拾目ありと云
 以上も大切なる事なり一冊あり
 余別業著侍考一巻と編て背ふ
 か

以下名香目録も六十六種あり外は
 家より所の名香目録も今計
 百二十種あり
 系極道卷取持の香目録なり道卷
 姓作の本名も氏号系極作酒判官
 應安年中に卒と記せし生れり
 風雅と樂し香と考はく性良
 物と月ひふけ入道なり一本の沈水

南と用ひ貴殿へさゆく名として命
ぢいけ人も起まり香道の開祖と
云づけ目録の香針三百七十七枚と
今世またくも名ある香ありは
父も貴と云づ道巻よりと二百六十
餘年ふたなり
奥書に云三條前内府とあり西三條殿
逍遙院公也天文六年十月二日薨去

ありけは本と志野宗信の清字なり
のり紙抄なり飛鳥井より茶屋松
ふ先ハ飛鳥井乃雅俊より雅綱の
清字なり云づ一云正二年の年号ハ
宗信没後の年号なり是ハ宗信が
傳寫の附加一云号する處一云宗信が
字なり内乃自号と云ふ處ハ奥の
宗信が六十一様と号し同き年月也

宗信がくへに必なり

○宗信筆記考

凡香の樂に閑靜の歌ありて其優
劣と云ふべし人の聞て其の優
員と云ふと云ふの事ハ皆後ハ世ハ中
より事ありて一焼組の香ハ其又香れ
名と云ふ付合せし焼組と事具と
事ありて古雅なりて其の香ハ其
をわきもくもく其の品味は其の面

白く意味ありてあるはわうくさび
 或はうさやうは新よふくのふ所味
 のわらういふときらにふ条末なる
 本とてこれのうけの白いよりを
 のさればわうゆうをくらめわきと機
 ひとるゆきといわうもた人の顔やま
 うふわれは優劣とわうそのに名とて
 付合せは事ありて雅興さるべし細ん

乃人いふひと辞ひうく先は焼く事
 う大机より名は付合者わうは焼く
 数種より及いて次は印者の人より後
 らばは紙具わうがためうとてく
 香と焼くさよはまうはわううしに
 かたわひさうもゆきとてふたは焼
 ゆんよは名縁うたうきとては焼
 うちうき一花の月日夕暮宴具

二三種もいづれにハ只その所の焚具
なればお合せらる香何れも焼く
魚一社具のてされいひてはよく
る向うをねも志ゆき人へんはひ
わぐさ事なり

四季乃香ハ香の名よりて四季乃
くの景物の名わる香といふ香
は家者今ハ入るもいふ香の名わ

香と入る事なり一常ふ所おせし
も二三種香も思ひて香とわぐさ
品高所ハ香と焼ゆるふ具わる魚
ち一四季にわる香と焚事ハ是
魚一とつて沈むる香も香所
乃時と内分の香れ香と焼く
書ハゆきハ焼く事なり志難
類さどの名わる香と所わるハ名

續ゆんそんをさるん和すの四季を
 報わらぶ一尤季にふていじま
 本所わると云はれり
 上の香は十粒の名香をとり
 なりてふた香と焚くわとす
 藤本と焼ゆんは具なくすへゆりま
 所具と改め焚くは丹霞沈外と
 と焚具を改めらる事なり況外と

は香はゆり子細なる事なりとされど
 始より十粒の香をど焼出とぬるに
 付文より主方より焚きゆんは
 心づいなる事なり
 香はみ息七息のうへへる事なり
 人の様なり紐香十人より三息み
 息のうへへるに
 名香本より多く焚きより事なり

名香ハ自家の産のこふわと別て
 名香ハ天下の産のこふわと別て
 焚ゆるハけがらわらざる事なり
 白く汚きまきとわが多く焚へ
 うやほはるも臭くともものなる
 うり名香ハ牧脚ハ馬尾三分など
 傳ふは少げう焼へる事なり
 とふよりまづこ多ハ笑ふに事なり

ぎん小香ハ沖まであられ付くハ小刀
 まそそげハ内指ハ少水と付て沖へ
 ちりちり湯水ハ久しく川を流る
 根ハよくくさるものなり
 根のきくハ香筋とわが事なり
 乃はるる流を帯ハ香筋とわが事なり

ねらふ事なり宗信の法なる香を
てりも根と云れやう根なるの製
そのころ
そはる事なり一も法なり書
根なる事味考後世根なるに
起ア一なりぐ一なり根香なり末なり
そはる事なり連中と云ふられ
根の香取いまりなりいきんと
きふと云ふなり

なりと云ふなり一も法なる香
根なる事味考後世根なるに
起ア一なりぐ一なり根香なり末なり
そはる事なり連中と云ふられ
根の香取いまりなりいきんと
きふと云ふなり

春日野の花より事へ方中へ楠硝入
ふせんふねふひ花事あふぐく

盆

東山殿は足利尊氏八世義政公なり
号は照院茶香の甚人なり清小
府殿新は安永の折宗信へ香は所
望の内八重垣と焚き事い出雲八
重垣の神祇の意よりなるべし

白をををををの意味よく
分別して真の真で焚へ

香煙あけまは本書の流のり水は
ふみひやともう入流ふねゆき
色深物とかり茶かどの内茶碗より
へいふとぐぐぐ寸法は八寸に八寸ど
かりう久へ竹くても用也るなり
新電より物の香煙より事水は

あつちをいふる家ゆりも鴨井お井
天井きどつちも同意する様よある鬼
瓦と云ふのも九折の一川ゆへ水成
つらどつちと云ふの意する鴨の香
煙と相するけさなり焚つて香しけ
んばいあるべし
野路家鴨の香煙の圖宗入る圖よく
も別之の鴨の香煙の圖宗入る圖よく
け國と云ふかたも云ふはま
り清取後一の法本書ゆらう

く初心の人のゆへに終る考人に授

す魚一

昔煙魚よのせと事へき人のこふ
ろろり解る糸道は意天目と用り
洞一かりゆへ平人といわゆる事や
ろ一亭主不案内と云ふ事と
も意するゆへ平人といふ香
煙けりれとてきく魚一

香爐三等の清取後一常かんが
魚一香道とんがふ人かれとみ
うへうと

児あふ女はも酒は香爐とせざ
事古れり禮男女授受不手を此
意かぐ一先又常にて一さむべ一組
香るは女帝の歌られはまうづり
聞事もある一るの内にわ聞をま

所は看てをゑあふ一がも酒わま
ト事あり

杉板めつるる深き子細わ秘
し傳るるわはるるのづに
中とれは先座とわむべ一善日乃舍
るは始りわめ事なるれども
は禁はたる座とわる事わ先
わはゆてうるる一えと是と靈

所とつとつ

茶碗の筋目の事いぢ人に傳とてい

てふふとぬは校とて

香煙のせふとぬゆとつとつゆらの

中へゆらと煙とととて聞香煙

ゆはきと煙とととてとてとて

世よ一まにとつとつ又香煙の中を

せふととてゆらとととて供あり灰を

せふととてゆらとととて根葉を取と

わと灰と入重ねて得わとととと

卓へとゆらとととと世よ多く知事と

は悉くちとととかんぐんの事い世よ多く

ととと東山殿湯湯記よわとゆらと

ととと別よ寸法格好あり

茶と湯のつと香別よ知多と香と

茶と湯と香煙ふわりとととと

濃茶とつりきり

香袋の結いしめくじとびやうありきり
そふ十粒香箱の袋香煙袋ふ名
多々小粒よりちより花結とてふく
たなる花結ふの形は結り別は花結
乃書一卷ありて白紙と名付て笥
よかきと結の事ハ面接は決まりてハ
傳へて香袋の事奥よりく

こそ製やうすしと著しゆ

是より四十九ヶ条ありけり別て秘傳とふ

蘭者侍い字が秘事よりけ事ハ今世

は多く知らず一日本人と云文字ハ

ら字の内よりあり云傳ふより蘭

著ハ胡語之應巻也と朱子語類及事

物紺珠ふよりく

香煙火よりハ香筋おんたがしと云ふ

て火元はく事大氣とつゝくぬせんぐ
にありおへ大筋とつゝく火味とふ
道臭るにやうぐゝ火元へくゝ入
ふりいゝるやうめても香川散香香媒
るゝとて用る事やう委く考志は
載ゆ

床は並時盆より口傳方一とするや
軸脇軸は軸之の方ありて又所方

接ふより多々並所ありは扱ふて
い洋はゆぐゝ

香ととやうに色事小き香ハ花
わいふと紙は色ぬぐう一花や
うと別べーとて

香爐は火取事香才一とて要なり
お人定とておひおひ底のわ物
とねがーとておひおひと入るぐゝ始

まづは別てあられざるやうにぞ一
法隆寺の赤旗檀よりと云脱戸皇子親
音の像とゆりそしひそそ削をどと
箱は細々今に彼寺乃什抱くそ人間
ふづる事さるに香より宗信時代より
此の世よりと云て風の穴より風
しりて世よりと云て中げからんと
のやうなる事と云やう小書るやう

秘伝より或大家より金子やみ十両
てけけりし事ありお月やまの伝やう
の事多し法隆寺よりあるによりけり
香の名となり又金子乃香殿より
香されむは名とがより金子よりある
金一板より丸よりあるに沈香より
ハ海人の献り沈水香なるべし
東大寺のよりある委く辨どい宗信の

書より一寸書方とわり又一寸は一寸ハ
分ともわり

三吉野より山下轉倒錯れせし事考

此の中は辨じ

うゝ孫の事一二三とかさううゝ孫と

刻よりなり数あるわふよりめちつ時を

うゝ孫はるれゐうにえし

丹霞は本佛像より古丹霞和尚本仏

像よりて大は焚し故事よりゐるに

名付しわづしゐるの小事もねし

せし三条殿へは親よりわし事

て沙家の事より知し

宋祇の姓は飯尾紀州の人連子と好

と香と時々増はるゝ人より

鴨の香煙同やうなつゝの事かえ

能くしまとゞしづめんぎやうの事渡

と方へ尾とひけまづれた事^{こと}を要^{もと}するべし
まづとらば香煙^{かうえん}ときりくとおまうとる
ふれわどた乃方^{のう}右の方^{みぎのう}の人へ渡^わと事^{こと}
と云^いと心得^{こころえ}べし一^{ひと}座^ざよりて我^{われ}たふ座^ざの
事^{こと}もわろ右^{みぎ}と座^ざの事^{こと}もわろとがくろ我^{われ}
へ尾^おの^のととひけまづれはもあがりいと
心得^{こころえ}べし

香煙^{かうえん}火^ひつゝも時^{とき}あつまうと座^ざとわろ出^でたり

と云^いふ方^{かた}くと事^{こと}もそれより香煙^{かうえん}
銀^{ぎん}の^の中^{ちゆう}はとらとがくろふとくし
と云^いふ方^{かた}くと事^{こと}もそれより香煙^{かうえん}
つゝと云^いふ方^{かた}くと事^{こと}もそれより香煙^{かうえん}
口^{くち}傳^{でん}あつたり
八卦^{はくぱ}香煙^{かうえん}ハ四季^{しき}の卦^けと考^{かんが}ふ方^{かた}へ節^{ふし}目^め
付^つ金^{かね}一^{ひと}と云^いふ方^{かた}くと事^{こと}もそれより香煙^{かうえん}
座^ざと云^いふ方^{かた}くと事^{こと}もそれより香煙^{かうえん}

香煙^{かうえん}火^ひつゝも時^{とき}あつまうと座^ざとわろ出^でたり

改^て字^そ信^{しん}時代^{じだい}墨^{すみ}季^きの^の灰^{はい}とやう^{とやう}の^のと云^い
 俗^{ぞく}説^{せつ}の^のま^まやう^{やう}に^に辨^{はん}せ^せま^まう^うなり^{なり}今^{いま}
 坊^{ぼう}間^{かん}の^の板^{いた}本^{ほん}に^に香^{かう}之^の記^きと云^いもの^{もの}の^の所^{しよ}墨^{すみ}
 の^の灰^{はい}とやう^{とやう}と^と圖^ずして^{して}花^{はな}の^の形^{かたち}を^をせ^せう^うか
 やう^{やう}な^なり^りたり^り人^{ひと}も^も常^{じょう}種^{しゆ}の^の大^{だい}道^{どう}
 具^ぐと^とり^りて^てい^いゆ^ゆ事^{こと}か^かう^うに^にい^いじ^じ
 俗^{ぞく}より^{より}に^にぢ^ぢや^や正^{せい}統^{とう}の^の香^{かう}道^{どう}と^とは^は曾^{そう}
 て^てる^る事^{こと}宗^{そう}信^{しん}の^の説^{せつ}と^とあ^あう^うと^とい^い

い^い書^{しよ}乃^の奥^{おく}事^{こと}と^と志^し野^の家^けも^も西^{さい}三^{さん}条^{じょう}家^け
 の^の傳^{でん}り^り事^{こと}知^ちべ^べー
 能^{のう}り^り孫^{そん}姓^{せい}ハ^ハ中^{ちゆう}尾^び名^なハ^ハ真^ま能^{のう}春^{しゆん}鷗^{おう}齋^{さい}
 と^と号^{ごう}と^と足^{そく}利^り家^けの^の童^{どう}朋^{ぽう}と^とり
 真^ま相^{しやう}ハ^ハ相^{しやう}阿^あ弥^ゐと^と云^い真^ま能^{のう}ハ^ハ孫^{そん}藝^ぎ阿^あ弥^ゐ
 が^が子^こなり^{なり}鑑^{かん}岳^{かく}と^と号^{ごう}一^{いち}松^{しょう}雪^{せつ}齋^{さい}と^と云^い茲^{こゝ}
 照^{しやう}院^{いん}殿^{でん}ハ^ハ付^つく
 珠^{しゆ}光^{かう}ハ^ハ南^{なん}都^と称^{しやう}名^なの^の傳^{でん}系^{けい}人^{にん}の^の事^{こと}と^と同^{どう}

御

松平八氏より字珠報珠光が弟子より

或は松平通貞と云々

御辱るゝと云々

なり宗信湯家と云々

よ里より云々の

文能元多の百五代 後柏系院の

号より享保十九寅年と二百四十四

小なり宗信姓ハ志野字三郎右衛門
と云るなり義照院殿は侍

○香合式

け筆記ハ香合の式と宗信事のこと
より書るなり是も 三條殿へ沙羅
より云るなり定らるる式なり新代香
合の式より余所家より別々香合
後菴の判の詞より 述を院公乃

の跋と云ひし本書の字と傳ふ
 葉物合ハ東山殿の式判の綱とある
 書られと傳ふ
 後菴ハ牡丹花老人と号し一宵柏
 子と云人そり其法の香好く三毫
 記と云ものわりて香と花と酒とす
 けうと云やう奥平親王の子孫とて
 揚州呉服里よりけり風雅の隠士とす

此省巴の奥書の中本又十ヶ条
 と云ものハ志野宗信が記せり甲午九
 ヶ条と指りし書とけりけり字をせ
 しより本本と云方とて
 永禄元通ハ百七代 正親町院元年也
 享保十九年まで百七十七通となり
 省巴の小傳前よりてり
 ○宗温六十一将名香記考

香道と云はくものり弟子は後
勝なり天正二年八百七代 正親町帝
の元年号享保十九年中で百六十一
多よなりなり宗温ハ宗信子なり
名ハ祐憲字ハ弥三郎と云なり

香道集之巻上終

